



Title	伝統主義と構造主義
Author(s)	福村, 虎治郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 11, 148-134
Issue Date	1963-02-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33276
Type	bulletin (article)
File Information	11_PL148-133.pdf



[Instructions for use](#)

伝 統 主 義 と 構 造 主 義

福 村 虎 治 郎

伝統主義と構造主義

福村 虎治郎

(一)

戦後我が国に紹介されたアメリカの構造主義はその後我が国の言語学界や教育界に大なる影響を与えている。私はこの論文に於て、文法の領域内でそれと従来の所謂伝統主義とを比較し、両者の間に見られる異同の点を明かにしようと思う。いうまでもないが、あるものの特徴を論ずる場合、他のものとの比較が考慮されて初めてそれが可能となるのである。従来我が国で構造主義を讃えるとき、その点への考慮が欠けていることが稀でなかったと思われる。

例えば名詞を修飾する語が二つ以上あるとき、伝統文法ではいかなる順序でそれが並ぶかも充分明かにされなかったが構造主義によるとこれが解決されていると言われることがある。しかしこのようなことが両者の区別をなす本質的なものかは甚だ疑わしい。動詞を修飾する語(句)が二つ以上ある場合については、伝統文法でもそれについて述べている。例えば、H. E. Palmer : *A Grammar of Spoken English* § 457, M. M. Bryant : *Modern English and Its Heritage* pp. 365-366, A. S. Hornby : *A Guide to Patterns and Usage in English* pp. 190-192. それならば、このようなことは、伝統文法でも、名詞の修飾語に関してもなされ得る筈である。事実 Hornby の同書 p. 174 に簡単であるが言及している。構造主義の言語観や方法がそれを容易にしたことはあるかもしれないが、しかし伝統文法によっても修飾語(句)の順序は解決出来た筈である。

また Voice に関して次のように言われることがある。従来の文法は John beats Paul, Paul is beaten by John を Active と Passive の対応形としているが、これは内容と形式を混同したものであり、構造主義の新しい文法からすれば、Active と Passive の対応は John beats Paul, John is beaten by Paul でなければならないと。しかし伝統派に所属すると思われる大塚高信博士は既に John beats Paul を John is beaten by Paul と比較すべきことを述べている(英文法論考 p. 72)。一方構造派であると思われる W. N. Francis は、そのようなことにかかわらず、They built a house, The house was built を対照させている(*The Structure of American English* pp. 335, 344-345)。N. Chomsky は構造派に属さないのであろうが、⁽¹⁾構造派と同様に文法に意味を考慮することを排斥するのである。しかし彼の文法に於て

1. R. B. Lees は Chomsky 派であると考えられるが、'A Multiply Ambiguous Adjectival Construction in English' (*Language* XXXVI, 2) に於て、アメリカの構造派を批判している。また A. A. Hill は 'Grammaticality' (*Word* XVII, 1) に於て 'structuralists' と 'transformationists' を相対するものと考えている。

は Active と Passive の対応は所謂伝統派のそれと同じである (*Syntactic Structures* pp. 77-78). 結局このような違いも伝統主義と構造主義の本質的な違いによるものではないと思われる。

(二)

そこでアメリカの構造主義の特徴は何かということに考を進めて行こう。ところがアメリカの構造派内でも人によって違いが認められる。従って構造派に賛成する場合も、またそれを批判する場合も、全体的に考えているのか、ある個人のまたはある特殊の点に関して述べているのか明確にする必要がある。そうでなければ、とかく問題点が曖昧になり、論点がずれてしまう。例えば、意味について、この派は一般にはそれを外的なものとするのが特徴である。しかし細部では異なる。或る人が L. Bloomfield の刺激と反応 S—R の説を批判した。それに対して Bloomfield の記述が言葉の不足のため、誤解されているのであり、C. F. Hockett がその点をよく説明していると述べられたことがある。しかし Hockett 自身が Bloomfield の S—R 図式に欠陥 (defect) があるとしているのであるから (*Manual* pp. 6, 12), Bloomfield の図式が誤解されたとは一概に言われない。

そこで構造派内で見られる違いを二三述べてみる。E. A. Nida は *Synopsis* に於て文型を Major sentence type と Minor sentence type に区別し、Major sentence type を更に Actor-action clause type と Goal-action clause type に分ける。そして前者は更に Transitive clause type, Intransitive clause type, Equational clause type に分けられる。ところが B. Bloch and G. L. Trager は *Outline of Linguistic Analysis* に於て、Nida の Equational clause type も Goal-action clause type も等しく Actor-action の型の中に含ませている (p. 75)。P. Roberts は更に、基本的な文の型の数は構造の記述の精密さによるものであり、その数は決めにくいとしている (*Patterns of English* p. 297)。そして重なるものとして次のような文型をあげている。Birds sing, Birds are happy, Pigeons are birds, Robins like worms, Robins consider worms candy, People feed pigeons crumbs, There is a man here. このようになると Hornby の Verb Patterns に見られるような伝統文法に接近して行くであろう。

品詞の分類は伝統文法でも種々論ぜられてきたのであるが、これは構造派でも十分に解決されていない。多くの人は Noun, Verb, Adjective, Adverb の四つの形態上の語類を認めることには一致している。しかし G. L. Trager and H. L. Smith, Jr. では、Pronoun が Noun, Verb, Adjective と同列にされ、Adverb はこれらとは別にされている (*An Outline of English Structure* pp. 60, 74)。C. C. Fries はその *The Structure of English* で Function words の Group を15とする。しかし Roberts は前掲書に於て、大体12位であるが (pp. 12, 150), 文の型の場合のように、いかに精密に構造の記述がなされるかによって、その数が左右されると言う (p. 293)。そして個々の語の所属の Group は Fries と一致していない。例えば

助動詞の do, does, did は Fries によると独立の Group G をなすが (pp. 96-97), Roberts はこれを must や can と同一群となす (p. 274). また Fries は therefore を普通接続詞 (Conjunction) とされている when, because, and 等と同じく Group J とするが (p. 100), Roberts はこれを区別する (pp. 210, 220). 品詞の分類に関係する prettily の -ly は Hockett によれば Inflexion の例である (*Course* p. 210). Francis によると Derivation の例であり (*op. cit.* p. 283), J. Sledd も同様に考える (*A Short Introduction to English Grammar* p. 80).

このように品詞の分類に違いが生じているが、その分類の基準や方法も一致していない。Trager and Smith は英語に関し語形的分布と統辞的分布に従って二組の語類を作る (*op. cit.* p. 74). 従って、例えば、無変化の must は語形的分布から Verb でなく、統辞的分布によって Verbal である (p. 78). H. A. Gleason, Jr. もこのような方法をとる。従って彼によると英語の beautiful は -er, -est の変化をしないから、Adjective ではないが、統辞的分布からして Adjectival である (*Introduction* pp. 95-96). Sledd も二様の分類をなし、第一の分類では、chaos は Noun でなく、must は Verb でなく、beautiful は Adjective でなく、beautifully は Adverb ではない (*op. cit.* p. 81). Francis は前掲書でこの二種類の基準を同時に用い一種類の分類を考える。Nida も前掲書に於てそのような方法をとっているようである (cf. *op. cit.* p. 43 footnote). Fries と Roberts は統辞的方法によって語類を決定しているようであるが、実際には語形的と統辞的の二つを共に用いている。従って矛盾していると考えられる例も見られる。例えば名詞の所謂所有格は後に名詞を従えても名詞とされているが、代名詞の場合 my, your 等は Determiner である (Roberts : *op. cit.* pp. 37-38, 289 / Francis : *op. cit.* pp. 238, 246-247 / Fries : *op. cit.* pp. 89, 117-118). しかし Fries では John's も Determiner の例になっている。Hockett も *Course* に於て同じような方法をとる。しかし彼の場合語形的分布が拡大され形態上同一の語幹 (Stem) または語をなすということが重要な基準となる。従って同一語または語幹であれば名詞的、形容詞的というような異った種類の分布をなすものでもまとめられて特殊の語群を形成する。例えば、英語で strength, food, etc. は N, long, false, etc. は A, American, sweet, etc. は NA. かくして英語の品詞は N, A, V, NA, NV, AV, NAV の他に Particle があることになる。そして Particle は統辞的分布によって下位区分される (pp. 225-227). しかし厳密にこのような組合せを考えて、それを Particle にも適用すれば、数は更に多くなり複雑なものとなろう。例えば round, down, etc. A. A. Hill の場合は更に混雑している。彼は Trager and Smith 式と Hockett 式の方法を混合し、例えば content, asleep, abroad 等は特殊の分布をなす故一つの組 Adjunct をなすことを提唱する (*Introduction* pp. 239-241). 彼はまた基準に文強勢をも取入れる。従って例えば、What was the picture painted like? の like は第一強勢をとるか第三強勢をとるかによって副詞か前置詞か決定される (p. 404).

またある一つの基準例えば統辞的分布だけを考えても必ずしも一致した結果が得られていな

い。Fries によると the rich, the poor 等の rich, poor は大体名詞に対応する Class 1 である。何故なら the と結合する (*op. cit.* p. 118)。しかし Roberts によると Adjective である。何故なら very が前に来得るから (*op. cit.* pp. 155-156)。また Roberts によると, Writing letters is a nuisance の writing は目的語を持っていて Verb である (p. 156)。しかしその前に my とか his が来得るからこれも問題が残ろう。Fries は修飾の構造は直接には品詞に関係しないと (*op. cit.* p. 239), Roberts も Subject, Object, Modifier などの機能単位 (Function unit) は品詞と区別しなければならないとする (*op. cit.* pp. 154-157)。しかし Fries や Roberts の品詞の分類には, 実際には修飾やその他の構造の考慮がなされている。従って彼等は品詞と機能単位の関係をもっと深く考える必要がある。

Sentence modifier についても必ずしも意見が一致していない。Roberts によると, When she got there, the cupboard was bare (*op. cit.* p. 113) の前半や, Usually we go swimming every week end (p. 240) の usually がそうである。Nida はこれに類するものを動詞主要部の修飾語とする (*op. cit.* pp. 144-146)。

Endocentric construction (内心構造) と Exocentric construction (外心構造) についても同じような状態である。Nida によると, have helped, am helping, am helped 等の Verb phrase は外心構造である (*op. cit.* pp. 199 ff.)。Hockett は助動詞 do を外心構造の一種である Directive とする (*Course* p. 263)。ところが H. Whitehall はこれらを内心構造とする (*Structural Essentials* pp. 12-13)。Roberts は必ずしも明かではないが, Whitehall と同じ意見のように見受けられる (*op. cit.* pp. 41, 145, 269)。動詞と目的語の関係は, Z. S. Harris (*Methods*), Fries, Roberts, Whitehall 等によれば内心構造と認められる。しかし Hockett はこれを外心構造とする (*Course* pp. 185, 191)。Francis もこのように考えている (*op. cit.* p. 292)。Hill はこのような区別はあまり重要でないとする (*op. cit.* p. 128)。そして of me の me を 'head' と呼んでいる (p. 249)。

このような違いは意味がそれ程問題にならない音素論の部分にも認められる。例えば Hockett は接続 (Juncture) の位置についても Smith, Trager, Roberts 等と異なる (*Course* p. 61)。接続そのものの性質についても意見がまだ一致していない。このように所謂構造派でも違いがあり, それは Francis も認めている (*op. cit.* p. 428)。このような相違のあるものは時がたてば解決されるであろう。しかし総てがそうなるとは思われない。またあるものは解決ついたらしても, 新たに他のものが問題となることもあろう。一方言うまでもなく伝統派内に於ても違いは沢山ある。例えば Jespersen の Three Ranks 説の如きである。それで我々はアメリカの構造主義の主なる特徴は何か確める必要に迫られる。

2. Fries はその後考えを変えたようである (cf. 英語青年 CVI, 2 Eigo Club)。

(三)

先ず第一に形態の重要視である。伝統派でも Jespersen や Kruisinga はかなり形態を重要視している。しかし形態だけで言語が成立するかこれは問題である。勿論言語にとって形態は必要かくべからざるものではある。Bloch and Trager は言語を次のように定義する。

A language is a system of arbitrary vocal symbols by means of which a social group cooperates. (*op. cit.* p. 5)

Francis は音形態が言語であるとして次のように定義する。

A language is an arbitrary system of articulated sounds made use of by a group of humans as a means of carrying on the affairs of their society. (*op. cit.* p. 13)

これらは表面では意味について言及していない。しかしこれらの定義でも言語は限定されていない音ではなく、限定された音である。そしてその限定は結局意味を伴っているということになるであろう。Hockett は人間の発する音のうちで言語が他のもの例えば咳とか笑声などと区別される重要な基準の一つとして 'grammatic structure' をあげる (*Manual* p. 17/*Course* pp. 574-575)。ところが彼にあっては、文法の基礎的単位である形態素 (Morpheme) では意味も考えられている (*Course* pp. 123, 134)。Gleason も同様である (*op. cit.* pp. 66-67)。彼は言語にとって内容 (Content) が重要であると考え、彼は内容そのものが意味であるとは考えていないが、ともかくこのような点では伝統派に所属するとも考えられるであろう (*op. cit.* p. 3)。勿論 Hockett の 'grammatic structure' は、一旦言語であるということ認めてからは、意味を考慮しなくてもある程度認められる。即ちいかなる形態がいかなる形態といかに結合するかである。しかしこのような外的な構造ならば、言語でなくとも我々は任意に工夫し定めることが出来るであろう。言語の場合は意味によってそのような形態や結合形式をとることを我々は認めざるを得ないのである。Hill はかなり徹底して形態素の認知にも直接には意味を考慮せず、接続と分布を基準とする。しかし彼でも言語の特質は symbolic であるとし (*op. cit.* p. 9)、従って言語は意味を持つとする (p. 6)。それ故に結局意味の研究は言語学の一部とならざるを得ないであろう。

J. B. Carroll は言語を次のように定義する。

A language is a structured system of arbitrary vocal sounds and sequences of sounds which is used, or can be used, in interpersonal communication by an aggregation of human beings, and which rather exhaustively catalogs the things, events, and processes in the human environment. (*The Study of Language* p. 10)

しかし彼は言語の組織なる考には意味の組織が本質的なものであると言っている (p. 28)。Hockett はアメリカの構造派に相応しく、意味を外的なもの、言語外のものとしているが (*Manual* pp. 5-6, 11-12)、それにもかかわらず、central ではなく peripheral なものではあるが、

semantic system を phonetic system と同列にしている (*Manual* p. 14, *Course* pp. 137-138). 従って言語外とされたものが言語の研究として言語内のものと同列にあることになる。

言語の成立に関して形態と意味との相互依存の関係は、丁度 pin と tin の違いを成立させる際の p-, t-, -in の相互依存の関係に似ている。この場合勿論 p と t の違いがなければ pin と tin は区別されない。しかし孤立した単なる p と t の違いだけで pin と tin の違いが生じているのではなく、-in との結合に於ける p と t 即ち pin, tin 全体の形態に於てそれが生じているのである。

Hockett の態度は上に述べたが、彼はアメリカの構造派の一人であるが見解に余裕があり、最近の論文 'Linguistic Elements and Their Relations' (*Language* XXXVII, 1) に於て、(utterances—C→)macrosegments—C→microsegments—C→(syllables—C→)phonemes—C→components の phonological stratum と、sentences—C→clauses—C→phrases—C→words—C→morphemes の grammatical stratum を認め、以前からの Duality hypothesis を明かにする。そして phonological stratum から grammatical stratum に移るにはある新たな基準が必要であると、次のように述べている。

In fact, the additional criterion, that must be added to phonological information in order to get to the grammatical stratum, is always at bottom semantic, no matter how disguised.

このようにしてアメリカの構造派も実際には程度の違いこそあれ意味にたよらざるを得ない状態である。従って意味論を言語学の一部門と認めざるを得ないであろう。このような点に関して、デンマークの構造派が意味をも考慮していることは注意すべきことである。構造派に所属しないものは現在でも意味を考慮した研究の対象とすることはいうまでもない。例えば Jean Perrot は *La Linguistique* (Que sais-je?) に於て、言語の研究分野に関して、S. Ullmann の *The Principles of Semantics* の図 (p. 39) を示し、意味の分野を形態の分野と対等に取り扱っている (p. 122)。Ullmann も同書 pp. 317-318 で言及しているが、W. S. Allen は *On the Linguistic Study of Languages* (p. 22) に於て次のように断言している。

And surely without meaning linguistics cannot exist.

次に言語形態としての音と文字の問題がある。この点構造派は均衡を欠いて音を重要視していると思われる。所謂伝統派でも音の優位を認める。そして歐洲の言語学のこの傾向が明治以後の日本に於ける言語学や国語学に大なる影響を与えたことは時枝誠記博士の力説するところである (国語学原論, 国語学原論続篇, 現代の国語学)。この問題も結局言語とは何かということに帰着する。この場合注意しなければならないことは、本質的でないということと研究の対象とならないことは同じではないということである。言うまでもなく対応する文字のない言語もある。しかし文明国では文字によっても先に言語の定義に述べられているような社会生活が現に行なわれていることは誰しも認めなければならない。そして音と文字とはかなりの程

3. C=is composed of

度に対応関係を保っている。そこで文字をも含めて言語と呼ぶべきかどうか問題となる。更にもしこれを言語に含めないなら、誰がこの研究をなすのか問題となろう。

ところが Gleason, Francis 等構造派の学者もその言語学や英語学の著書に於て文字を取扱っている。Hockett は Gleason がこれを 'written language' とするのに反対し、'writing style of a language' と呼ぶ (*Course* p. 549)。しかし彼も文字を取扱っている。アメリカの音声学者 C. K. Thomas もこれらを 'written language', 'spoken language' と呼び language はこれら両者を含むと考える (*An Introduction to the Phonetics of American English* pp. 39-40)。そしてこのような考が絶対にいけないということはないと思う。G. M. Messing もこういう点で構造派を批判している ('Structuralism and Literary Tradition' *Language* XXVII, 1)。

次に意味とは何かと言うと、既に述べたように構造派は一般には Bloomfield 式に、外的な刺激 (stimulus) と反応 (response) であるとする。そして Bloomfield によれば、現在の我々の知識ではこのような意味については正確には言えないとする (*Language* pp. 74-75, 139)。Carroll はこの点に関しては反対する (*op. cit.* pp. 27, 82)。しかし Carroll も意味を外的な S-R とすることは Bloomfield と同じである。Fries は Bloomfield 流にある現実の言語音の刺激となる状況や行為またはその音に反応する行為が文の意味であるとす。Hockett によると、現実の言行為の antecedent 及び consequence と形態素や発話の意味とは区別され、ある特定の場面に現実に起らなくても、また指示されるものが現にその場になくとも、普通起るところの行為や指示される外的な物と音形態の結びつきが意味である (*Course* pp. 139-141)。R. A. Hall, Jr. も意味を 'the meaning of any linguistic signal is the situations in respect to which we use it' とし 'the situations in which we use it' と区別する (*Leave Your Language Alone!* p. 117)。しかしいずれにしても 'overt' な行為や物体だけが主に問題とされ、think, believe, etc. の 'implicit' な行為、また「円い四角」のように実在しないものに関する意味は問題にされないか敬遠される。

従って想像的な仮空の行為も意味の外に出る。例えば、1961年11月現在「月の世界に旅行した」は意味がなくなる。また仮定法表現のあるものも無意味となる。これで満足出来るかは問題であろう。また彼等のような立場に立つと、to get done the things we feel must be done (Francis *op. cit.* p. 6), we may become so sure (*ibid.* p. 34), imagination (Hockett *Course* p. 326), connotation of unhappy mood (*ibid.* p. 313), we are sure (*ibid.* p. 377), emotional connotations (*ibid.* p. 432), introspectively obvious (*Manual* p. 13) など彼等が現に使っている多くの表現の意味はどうなるのか。Hockett は *Manual* で internal な刺激をも考えているようである (p. 12)。そうすると問題は我々の周囲の外的な世界だけのことでなくなるのではないか。

このような行動心理学的な意味の考方はアメリカの構造派に限られるのではない。意味の取扱い方についてはアメリカの構造派に賛成しない J. R. Firth も意味そのものについては彼等

に近い (*Papers in Linguistics* pp. 190, 219, 225). E. Leisi もそうである (*Der Wortinhalt*. pp. 3, 116). しかしまた構造派でも既に述べたように Gleason はこの点伝統的である (*op. cit.* 2-3, 54). 意味をとにかく内的なものに関係するとする立場をとる Ullmann はそれには内在的な弱点 (inherent weaknesses) はあるがうまくゆくというような意味のことを述べている (*op. cit.* pp. 303-304). S. Potter もこの点 'behaviourism' に賛成しない (cf. *Modern Linguistics* pp. 141 ff., *Language in the Modern World* p. 162).

(四)

以上は大体言語とは何かということに関係する。次に研究の方法に移るが、彼等が構造の単位の異同を決定する基準の一つに分布 (Distribution) がある。ところが実際にある構造単位の分布を与えられた材料だけで徹底的に求めることは困難である。Francis もこれを認める (*op. cit.* p. 168). 従って資料提供者 (Informant) を使って置き換え (Substitution) の操作をなす。この場合自分が Informant であったなら、置き換えが可能か不可能かは機械的なものではなく意味にたよっていることが理解出来るであろう。事実 Nida は *Synopsis* に於て、Hill は *Introduction* に於て自分が Informant であるとする。それなら他人が Informant になった場合、やはり意味にたよっていると仮定しても差支えなからう。

またこれを今問題にしなくても、ともかく置き換えを利用して分布を調べても、やはり現実にはある任意の構造単位の分布を徹底的に調べ他のものとの異同を確かめることは不可能であろう。従って実際には、それを簡略にするため、Fries が *Structure* でなしたように構造的意味が同一かどうかという条件で範囲を限定し置き換えが可能かどうか調査することもある。そうすれば、彼等が主張する客観性は失われることになるであろう。この方法に徹した Harris も構造の異同を決定するにある場合は 'equivalent' なる構造に依存する。例えば、She made him a good husband because she made him a good wife に於て、前半と後半の構造上の違いは、所謂性 (Gender) を考えても解決出来るが、今一つの解決法は、前半には She made a good husband for him が同等のものとして置き換え出来ず、後半には she made a good wife for him が置き換え出来ることであるとする。この場合結局少くとも彼等の考える意味の異同が関係してくる (*Methods* pp. 271-273). Harris のこの方法は 'structuralists' と対立している Chomsky によって代表される 'transformationists' の方法と通ずる。Martinet もこのような場合意味の援助を許容する (*Éléments* pp. 40-41).

更に調査した範囲内での結果に基づいても、構造単位が少数のグループに簡単にまとめられるように分布が同一のものはない。分布は個差を持った例えば個々の猫とか林檎と比較さるべきものであろう。Sledd も名詞を修飾する語について、例をあげてこの点を指摘している (英文法研究 March '59). Hockett も cranberry の cran-, fro, kith, main, sake 等の例をあげて分布に関して、その自由さによって形態素を分類しようとするなら、はっきりした境界線を引く

ことは困難であると言う (*Course* p. 127). ある人々によって 'metalinguage' と呼ばれているものを材料とすれば, philologer と philologist も同じ分布を持ち得ない. 分布に限らず彼等の主張する構造認知の方法は総て語形態, 強さ, 高さ, 連接, 位置等外形に基づいている.

このように考えてくると, 構造派は彼等の研究の対象である言語現象を, 自然科学の対象と同様に考え, それを限定し, そしてそれに準じた方法をとっていることがわかる. しかし実際は対象外としたものに依存せざるを得ないこともあり, またその方法も実際には必ずしも厳密には守られていないこともあることがわかる. 次に何かしら構造上形態と意味の対応があると認める場合, 構造の単位の認知の方法とその後の記述との区別に注意しなければならない. Fries 達の言にはこの両者の混同が見られる. たとえ認知の方法が形態から行ったとしても, それと意味とが対応しているものなら, 構造の記述は形態を中心としても意味を中心としてもいずれでもあり得る筈である. 殊に意味と形態の対応が一对一でない場合そうである. Carroll もこの点即ち構造認知の方法と構造そのものの記述の違いに注意を促し, 次のように述べている.

As a matter of methodology, it is preferable to attempt the isolation of linguistic elements purely by reference to their distributional characteristics, that is, without reference to their meanings, but to describe a language without at some point stating its meanings is to set up a code book without a key. (*op. cit.* p. 28)

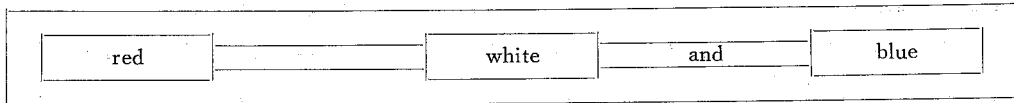
(五)

次に今一つの特徴は彼等の認める構造そのものに見られる. それは直接成分 (Immediate constituents) と二項構造 (Binary structure) である. 伝統文法に於ても分析された構造に於て, 総ての要素が同一平面におかれているわけではない (cf. H. C. House and S. E. Harman *Descriptive English Grammar*). しかし構造派の示す構造では少くとも原則として各位層は二項構造をなし, そのような位層が幾段にもなり得て極めて整然としたものである. そしてそのような位層が超分節的 (suprasegmental) 要素と語順によって機械的に決定される.

しかしある位層の構造が総て二つの構造に分析され, その各々が更に二つに分析され, それが位置や超分節的要素によって決定されるとは, あまりに機械的であり, 実際の言語に即さない. Saussure は *Cours* に於て言語形態の特徴として線條性を唱えた (p. 103). 超分節的要素を考えると, これはある程度修正されなければならない. しかし本質的には, 言語では幅が狭いことは否定出来ない. 従ってどうしても時間的に前後関係が生ぜざるを得ない. 従ってこの外的な前後関係が内的な構造の分析に常に忠実に従うかは甚だ疑問である.

そしてまた二項に分析されることも絶対的ではない. usually (Fries *op. cit.* p. 264), virtually any (Francis *op. cit.* p. 312) とかの制限がついていることから, 彼等も例外のあることを認めている. しかし彼等が例外とするものが実際例外とされてよいか問題である. Francis

は二項構造が適用されない唯一つの場合は red, white and blue のような並列関係の構造であるとする (*op. cit.* p. 356). そしてこの場合は次のように分析される.



そして red, white, blue が直接成分 (IC) のようである。しかしこの場合 and は何か問題が残る。in the city も in | the city, the | city のように二項ずつに分析されて行くのであるから、彼らによれば外的に表現された形態が総て二項ずつに IC に分析されるのが妥当であろう。従って and も IC の要素とならなければならない。そうすれば red, white and blue をとりあげるまでもなく、red and blue, windy but warm 等の極く普通の構造も二項構造でなくなる。⁽⁴⁾ このように極く普通なものも例外とみなし二項構造を主張することは事実を歪めることであろう。

Hockett は IC の二項構造は最も普通であるが必ずしもこれに限らないとする。しかし彼は sons and daughters のようなものは二項構造であるとし、and は IC ではなくその 'marker' であるとする (*Course* pp. 153-154). そうすると彼の考える二項構造は他の場合と違ったものとなり、IC 以外の要素なる marker をも認めたことになる。そしてこれは and や but ばかりでなく、both...and, either...or 等にも関係する (*op. cit.* p. 185). Hill の IC 分析も原則的には二つの分割を認める (*op. cit.* pp. 253, 277). 例えば順序は Fries と異なるが、Did John¹ | buy | a new car? の如くなる (*op. cit.* p. 283). また John¹ | picked | the books² | up の如く分割される (*op. cit.* p. 289). しかしこのままでやめることが出来ないようであり、結局 John the books picked up のような 'reassembly' を考えざるを得なくなる (*op. cit.* pp. 308,350). それでは上のような二項構造の分析の効用が疑わしくなる。Gleason は必ずしも二項を主張しない (*op. cit.* p. 142). 実際は構造派に所属すると考えられる Sledd もこれに対して消極的な態度をとっている (*op. cit.* pp.15-16).

最後に、このような二項構造を決定するのに先に述べたように語順や超分節的な要素による機械的な方法をとることであるが、これについては R. B. Long も批判している ('Words, Meaning, Literacy, and Grammar' 英文法研究 Feb. '59). 例えば Roberts によると、While we were waiting, the roof caved in では、第一段階の分析は waiting と the の間に起るが、The roof caved in while we were waiting ではそれが roof と caved との間に起る。これは語順ばかりでなく超分節的な要素によっても示される。しかしこのような分析は Long の言うように 'absurd' であろう。Hornby によると、He walked round the park twice before supper と Before supper he walked round the park twice を比較すると、後者では before supper

4. 実際これを三つの直接成分からなるとする意見がある。Nida, *Synopsis* 太田朗訳「英語シンタクスの概要」p. 7 参照。

が強調とか対照のために前におかれたものである (*op. cit.* p. 192). 上の二つの文にもこのような違いがあるかもしれない。しかしこの為 IC の分析が異るとなすことはやはり問題である。この点に関して Gleason は余裕のある見解を持っている (*op. cit.* p. 168).

これは Long も批判している an | experienced lawyer, a lawyer | with experience に於て目立ってくる。同様なことは Roberts がなしている次のような区別にも認められる。The children on this block | usually go to school on Saturdays, Usually | we go swimming every week end (*op. cit.* pp. 239, 240). その他 Fries や Roberts の方法によると a born poet, a poet born も夫々 a | born² poet, a² poet | born の如くになり違う分析となる。また the tall man on the bench も the | tall¹ man | on the bench の如くなるが、the の機能上これは問題であろう。Hockett は必ずしも機械的に IC 分析をやっていない (*Course* p. 188). Francis も実際に分析する際、Fries や Roberts と異っている (*op. cit.* pp. 312, 316).

以上のように機械的な方法によって、直接成分に分析したそれを二項構造に分析することの困難なことを実例でもって示してみよう。次の文はわが国のある高1の教材からとったものである。

"Follow me," cried the little man. On they went, climbing up, to the top of the mountain.

All at once a little valley opened before them. It was level, and on it the grass was short and thick. Rip thought he had never before seen so beautiful a spot.

Here were twenty more little old men, who looked very much like the man with the keg. They wore tall red caps, their coats had large brass buttons, their trousers were short, and on their shoes were huge silver buckles.

このような教材の英語にも on they went のように動詞の修飾に関し、so beautiful a spot のように名詞の修飾に関し、機械的に位置によって直接成分に分析することが無理な例が見られる。また Francis や Hockett 流に考えても二項構造でない構造も見られる。

従ってこのようなことを考慮すれば、例えば Do you go? などの場合、Francis がなしたように、

do	you	go
----	-----	----

 とでもしなければならなくなる。これがこみ入ると二項構造を認めたとしても、彼等が主張するような決して簡単なものではなくなる。これは Francis の前掲書 p. 388 に示された例を見てもわかる。N. E. Eliason は Francis の前掲書の書評に於て彼の図式を次のように批評している。

Chinese-box diagrams are used throughout the analysis of syntactic structure, a device I find extremely annoying, for it makes me feel like a rat forced to work its way through a maze. (*American Speech* Feb. '59)

Hockett は彼独自の図式を用いているが、これも時には極めて複雑になることを彼自身認めている (*Course* p. 156). またこのような分析では伝統文法の Object, Complement, Modifier 等の区別が曖昧となろう。

Hockett は音素の分析についてであるが次のように言う。

analysis cannot fill a pigeonhole which is in fact empty, or force symmetry where there is none. (*Manual* p. 73)

彼はまた次のようにも言う。

The latter (=the phonemic classification) depends not on what the physical measurements show, but on *what the hearer makes of it*. (*Course* p. 442)

これらの言は言語には機械的に行かない面のあることに気づいていることを表わしていると思われるが、アメリカの構造派は客観的な構造の記述を主張する余り、Hockett の注意するような誤りを犯しているのではないかと懸念される。

(六)

このようにアメリカの構造主義の特徴を調べてくると、そこに共通な要素は認められる。それは言行為の聴者の立場に立って客観的に認知し得る形態の構造を客観的な基準によって認知し記述することである。しかし現実の言語を取扱う場合は、研究領域に於ても研究方法に於ても、ある者は伝統主義を部分的に認め、またある者はその主張にもかかわらず、実際は部分的に伝統主義と同じになっていて、そこにはかなりの幅があることがわかる。また構造の規則正しさを主張するあまり現実の言語から遊離した記述をなす場合も生じている。従って構造派のある者と伝統派のある者との距離は一部の者が考えていると推測される程大きいものではない。Chomsky の考える文法や Sledd の *A Short Introduction to English Grammar* などこれを示すものであろう。このように考えてくると、アメリカの構造主義に賛成する者も反対する者も、少くとも幾つかの点に関して、表面だけの名称の違いに迷わされることなく、一応その見解や態度に余裕が出来て、建設的なものを発展させて行くものと思われるし、またそれは希望される。

参 考 文 献

- Allen, W. S. *On the Linguistic Study of Languages*
 Bloch, B and Trager, G. L. *Outline of Linguistic Analysis*
 Bloomfield, L. *Language*
 Bryant, M. M. *Modern English and Its Heritage* (Revised)
 Carroll, J. B. *The Study of Language*
 Chomsky, N. *Syntactic Structures*
 Firth, J. R. *Papers in Linguistics*
 Francis, W. N. *The Structure of American English*
 Fries, C. C. *The Structure of English*
 Gleason, H. A. *An Introduction to Descriptive Linguistics* (Revised)
 Hall, R. A. *Leave Your Language Alone !*
 Harris, Z. S. *Methods in Structural Linguistics*
 Hill, A. A. *Introduction to Linguistic Structures*, 'Grammaticality' *Word* XVII, 1

- Hockett, C. F. *A Manual of Phonology, A Course in Modern Linguistics*, 'Linguistic Elements and Their Relations' *Language* XXXVII, 1
- Hornby, A. S. *A Guide to Patterns and Usage in English*
- House, H. C. and Harman, S. E. *Descriptive English Grammar*
- Lees, R. B. 'A Multiply Ambiguous Adjectival Construction in English' *Language* XXXVI, 2
- Leisi, E. *Der Wortinhalt*
- Long, R. B. 'Words, Meaning, Literacy, and Grammar' 英文法研究 Feb. '59
- Martinet, A. *Éléments de linguistique générale*
- Messing, G. M. 'Structuralism and Literary Tradition' *Language* XXVII, 1
- Nida, E. A. *A Synopsis of English Syntax*
- 大塚高信 英文法論考
- Palmer, H. E. *A Grammar of Spoken English*
- Perrot, J. *La linguistique*
- Potter, S. *Modern Linguistics, Language in the Modern World*
- Roberts, P. *Patterns of English*
- Saussure, F. de *Cours de linguistique générale*
- Sledd, J. 'English Form Classes' 英文法研究 March '59
A Short Introduction to English Grammar
- Thomas, C. K. *An Introduction to the Phonetics of American English*
- 時枝誠記 国語学原論, 国語学原論続篇, 現代の国語学
- Trager, G. L. and Smith, H. L. *An Outline of English Structure*
- Ullmann, S. *The Principles of Semantics*
- Whitehall, H. *Structural Essentials of English*